平和のバトンを１１：０２から未来へ

松戸市立第六中学校　１年

福田　凛花

１１：０２。それは８１年前、長崎の人々がそれまで過ごしていた当たり前の日常が、1 発の原子爆弾によって一瞬にして奪われた時刻です。

私は今回、平和大使の一人として、８月７日から１０日まで長崎で平和学習をしてきました。その四日間で、私は原爆について学ぶだけでなく、「平和」とは何なのか、そして争いの記録をどのように未来に受け継いでいくべきなのか、深く考えることができました。

長崎ではまず、平和案内人の方の被爆当時の話を聞きながら、様々な平和建造物を見て回りました。その中でも、被爆時から今も開校している山里（やまざと）小学校の防空壕を目の当たりにし、衝撃を受けました。

８１年前、私よりも幼い小学生たちは暗く、息がつまるような防空壕に逃げ込み空襲警報が止むのを待ってい

たのです。この子ども達は今の私たちと同じように、明日があることが「当たり前」だと思っていたのでしょうか。

山里小学校の次は大学の医師で作家でもある永井隆博士の記念館と、永井博士が最愛の家族と一緒に暮らした如己堂へ行きました。

永井博士は、仲間達と研究中に被爆し、自分も被害を受け苦しい中、多くの被爆者を医者として救い、原爆の恐ろしさを受け継ぐ本や大切な家族への本を遺してこの世を去った、本当の優しさを持った人であると、強く感じました。

私は、原爆による悲惨な出来事だけでなく、そんな永井博士のような人を思いやって生きようとした人もいた、ということを伝えていきたいと思えました。

また、午後には原爆資料館や青少年ピースフォーラムに参加し、そこで私の中の原爆への考え方が大きく変わりました。

まず、原爆資料館には思わず目をそむけたくなるよう

な資料が展示されていました。その中でも特に衝撃を受けた展示物は、原爆落下地点から約８００メートル離れた場所にあった、原爆落下時刻の１１：０２で静止してしまった大きな柱時計です。その時計は秒針がなく、当時のものすごい爆風を物語るようにボロボロに壊れていました。私はその時計を見て、「１１：０２」という時刻が、それまで続いていた長崎の日常が消えた「時」を今に伝えているように感じました。

「時間」を表す時計だからこそ、犠牲となった方の時間があの日からずっと止まったままであることを無言で突きつけられたような気がしました。その時刻を境に、大事な人や物が消え去ってしまった絶望は、私などが簡単に想像できるものではありませんでした。

そして、原子爆弾は奇跡的に生き残った人々の心や人生にまで影響を残したのです。

また、青少年ピースフォーラムで、特に印象深かったのは、被爆当時８歳だった被爆者の清野（きよの）さんのお話です。清野（きよの）さんは被爆時、原爆落下地点から１２キロメートル

程離れた場所にいたにも関わらず、爆風と地鳴りのような大爆音を経験し、さらに兵器工場にいた姉を放射線の影響で失いました。姉は被爆当初は無傷に見えたものの、突然体に異常が見られ、被爆から一週間程でお亡くなりになったそうです。

　放射線は目には見えません。しかし、大量の放射線を浴びた人の体には、その後も長く影響を残しました。語ってくださった清野（きよの）さん自身も、８１年が経った今も放射線の影響を受けているそうです。

　私はこの話を聞き「原爆の被害は今も続いている」と深く実感ました。

　三日目は、平和公園にて平和式典に参列した後、午後から二回目の青少年ピースフォーラムに参加しました。その日は、日本各地から集まった中学生達とピースボランティアの方と一緒にグループ分けをして「違うって悪いこと？」をテーマに話し合いました。私のグループでは「人と違うところは隠さなくて良い。互いを尊重し合うことが大切」という考えにまとまりました。

世界平和という言葉は私にはとても大きく感じます。しかし、このように自分なら「平和のために何が出来るか」を考えることなら私たちが今すぐ実行できる平和への第一歩だと思います。

そこで、私が掲げる平和宣言は「互いの考えを尊重し合う」です。この言葉を今後の行動につないでいきたいです。

最後に、私は今回の長崎派遣を通して、友達と過ごすような「何気ない日常」こそが平和なのだと気づきました。この平和のバトンを受け継ぐために、私は日々の当たり前を大切にし、平和について多くの人と一緒に考えていきたいです。